

ダニエル書 - 第百六十号

ダニエルの最後の幻の預言的意義：終末の時代のための真理の啓示

Jeff Pippenger

2024-03-26

ダニエルは第十章で、永遠の福音の三段階の過程によって嘆きの日々からよみがえらされた者として示されている。続いてガブリエルはダニエルに第十一章の預言的歴史を示し、こうして大いなるヒデケル川の光の歴史を明らかにする。

神の御言葉をさらに綿密に研究する必要がある。とりわけ、私たちの働きの歴史においてかつてないほど、ダニエル書と黙示録に注意を向けるべきである。ローマ権力や教皇権に関しては、ある点では語ることが少なくなるかもしれないが、神の霊の感動のもとに預言者と使徒が書き記したことに注意を向けるべきである。聖霊は、預言が与えられることにおいても、描かれている出来事においても、人間の器は姿を隠してキリストのうちに隠され、天の主なる神とその律法が高められるべきであることを教えるように、事柄をそのように整えてこられた。

ダニエル書を読みなさい。そこに描かれている諸王国の歴史を、逐一思い起こしなさい。政治家たち、評議会、強大な軍勢を見よ。そして、神がどのように人の高ぶりをくじき、人間の栄光を塵に帰させたかを見なさい。偉大なのはただ神のみと示されている。預言者の幻の中で、神はある強大な支配者を倒し、別の者を立てる方として現れる。神は、宇宙の君主、永遠の御国を打ち立てようとしておられる方—いにしえの日の方、生ける神、すべての知恵の源、現在を治める方、未来を明らかにされる方—として啓示される。むなしく自らの魂を高ぶらせる人間が、いかに貧しく、いかに脆く、いかに短命で、いかに誤りやすく、いかに罪深いかを、読み、悟りなさい。

聖霊はイザヤを通して、私たちが最も注意を向けるべき対象として、生ける神、すなわちキリストにおいて啓示された神へと私たちを指し示します。「私たちのためにひとりの幼子が生まれ、私たちにひとりの子が与えられた。主権はその肩にあり、その名は不思議な方、助言者、力ある神、永遠の父、平和の君と呼ばれる」[イザヤ 9:6]。

「ダニエルが神から直接受けた光は、特にこの終わりの時代のために与えられたものである。シナルの大河であるウライ川とヒデケル川のほとりで彼が見た幻は、今や成就しつつあり、前もって告げられたすべての出来事はまもなく起こるであろう。」 Man uscript Releases, 第16巻, 333, 334.

聖霊は、ダニエルの最後の幻の預言の授与と「諸事件」とにおいて、第一の章（十章）が神の民の終わりの日における経験を表し、最後の章（十二章）もまた同様であるように、「事をそのように形づくられた」。ヒデケル川の光を成すこれら三つの章——それは「とりわけこの終わりの日のために与えられた」のであるが——の構成は、「真理」の三段階の定義を担うように意図されていた。最初のものが最後のものと一致し、その中間が反逆を表すことにおいて、私たちは、ヘブライ語のアルファベットの最初の文字、第十三の文字、および最後の文字によって形成されたヘブライ語の「真理」という語の構

造を見るだけでなく、アルファとオメガの署名をも見るのである。

ダニエル書第10章は、二千五百二十年に関する「ハズーン」の幻と、二千三百年に関する「マレー」の幻の両方を理解する十四万四千人を明らかにしている。彼らはこれら二つの幻を理解しているだけでなく、「現れ」を示す女性形で使役的な「マラー」の幻によって生み出される、信仰による義認の経験も持っている。

身体と同様に、知性と魂にとっても、力は努力によって得られるというのが神の法則である。発達は鍛錬によってもたらされる。この法則と調和して、神は御言葉のうちに知的および霊的発達のための手段を備えておられる。

聖書には、この世の生活にも来るべき世の生活にもふさわしい者とされるために、人が理解すべきすべての原則が含まれている。そして、これらの原則はだれにでも理解できる。聖書の教えを受け止める心のある人は、聖書のひとつの箇所を読むにしても、そこから何かしら助けとなる思いを得ないではいられない。だが、聖書の最も価値ある教えは、たまの、あるいは断片的な学びによっては得られない。その壮大な真理の体系は、せっかちに、またはおろそかに読む者に見いだせるようには示されていない。その宝の多くは表面のはるか下にあり、丹念な探究とたゆまぬ努力によってのみ得られる。大なる全体を形づくる真理は、探し求めて拾い集めなければならない。「ここに少し、あそこに少し」。イザヤ書 28:10

このようにして探し出して一つに集めるなら、それらが互いに完全に適合していることがわかる。各福音書は互いを補い合い、あらゆる預言は別の預言の解明となり、あらゆる真理は他のある真理の発展である。ユダヤの経緯の予表は、福音によって明らかにされる。神の言葉のあらゆる原理にはそれぞれの位置があり、あらゆる事実にはその意義がある。そして、その全体の構造は、設計においても実現においても、その作者を証ししている。そのような構造を構想し形づくることのできる知性は、無限なお方のそれ以外にはない。

さまざまな部分を探し出し、それらの関係を研究する中で、人間の精神の最高の能力は激しい活動へと呼び起こされる。そのような研究に携わって精神力が鍛えられない者は一人もいない。

聖書研究の知的価値は、真理を探りそれをまとめ上げることにのみあるのではない。提示された主題を把握しようとする努力にもある。平凡な事柄だけに心を占められていると、知性は矮小化し、弱ってしまう。偉大で遠大な真理を理解する課題を与えられないなら、やがて知性は成長する力を失ってしまう。この退廃への歯止めとなり、発達を促す刺激として、神の言葉の学びに匹敵するものはほかにない。知的訓練の手段として、聖書は他のどの書物にも、あるいは他の書物をすべて合わせたものにもまさって効果的である。その主題の偉大さ、言葉の気品ある簡明さ、比喩の美しさは、他の何ものにもできないように思考を活性化し、高める。啓示の途方もない真理を把握しようとする努力ほどの知的力を授ける学びは、ほかにない。こうして無限なるものの思いに触れた知性は、広がり、強められずにはいられない。

そして、霊性の成長においては、聖書の力はいっそう大きい。神との交わりのために創造された人間は、そのような交わりのうちにのみ、自らの真のいのちと成長を見いだすことができる。神のうちに最高の喜びを見いだすように創造された人は、心の渴

望を静め、魂の飢えと渇きを満たすものを、ほかの何ものにも見いだすことはできない。誠実で謙虚に学ぶ心をもって神のことばを学び、その真理を理解しようとする者は、その著者である方と触れ合うように導かれる。そして、本人がそう選ばない限り、その成長の可能性には限りがない。

聖書は、文体と主題の幅広さにおいて、あらゆる知性の興味を引き、あらゆる心に訴えかけるものを備えている。そのページには、最も古い歴史、もっとも真に迫った伝記、国家を統治し家庭を規律するための、これまで人間の知恵がいまだかつて及ばなかった原理が見いだされる。そこには、最も深遠な哲学、最も甘美にして崇高な詩、最も激情的であり最も哀切な詩が含まれている。こうして見るだけでも、聖書の記述は、いかなる人間の著作にも比べて価値において計り知れないほど優れている。しかし、それらを壮大な中心思想との関わりにおいて捉えるとき、その射程は無限に広がり、価値は無限に大いなるものとなる。この思想の光に照らして眺めると、すべての主題は新たな意義を帯びる。最も簡明に述べられた真理のうちにも、天にまで届き、永遠を包み込む原理が含まれている。

聖書の中心的主題、すなわちこの書全体の他のすべての主題が集約される主題は、贖いの計画、すなわち人間の魂における神のかたちの回復である。エデンで下された宣告の中にほのめかされた最初の希望から、黙示録の最後の栄光に満ちた約束「彼らは御顔を仰ぎ見、御名が彼らの額にある」（黙示録22章4節）に至るまで、聖書のすべての書、すべての箇所の主眼は、この驚くべき主題の展開、すなわち人間の高揚、そして「私たちの主イエス・キリストによって私たちに勝利を与えてくださる」神の力である（コリント第一15章57節）。教育、123-125。

たったいま引用した一節において、聖書は、文学のいかなる側面から考察しても、あらゆる人間の著作をはるかに凌駕するものであることが示されている。ホワイト姉妹は次のように述べている。「その頁には、最も古代の歴史、最も真実に人生を描いた伝記、国家の統治のため、家庭の規律のための統治原理——人間の知恵がいまだかつて並び得なかった諸原理——が見いだされる。それは最も深遠な哲学、最も甘美で最も崇高な詩、最も情熱に満ち、最も哀感に富むものを含んでいる。」そしてまた、「そのような構成は、無限なる御方の御思いのほか、いかなる精神も構想し、形づくることはできなかった。」

文学の構造を成り立たせる諸規則を見定める、人類において認められているあらゆる規則は、聖書によって凌駕されている。人文学の大学で提示され、並みの文学あるいはそれ以下の文学と、人間文学の傑作とを区別する原理は、ことごとく聖書によって凌駕されている。このことを念頭に置くなら、聖書全体の預言的証言の頂点、すなわちその壮大な結論が、ダニエルの最後の幻に表されていることを認識するのは、きわめて意義深い。それは預言的証言の要石であり、人間文学のいかなる頂点も、ダニエル書第十一章第一節に始まり、第十二章第四節に至る証言に比肩し得ないのである。

黙示録において、聖書のすべての書は合流して終結する。また、黙示録ではダニエル書と同じ系統の預言が取り上げられているが、両者の関係では最初の言及がダニエル書、最後の言及が黙示録である。すべては最初の言及の中にあり、すべてはダニエル書の中にある。そして、その書の頂点はヒツデケル川で与えられた幻である。その幻に示された出来事のクライマックスは四十節から始まり、第十二章四節でその書が封印されるまで続く。

これらの節は、シスター・ホワイトを含む古の聖なる人々が語り、記したあらゆる預言的真理の集大成を表している。

第十一章でその結論へと導くのは、同章に含まれる歴史的叙述であり、それらが同章の最後の六節の正しい理解に証言している。そこでは、竜、獣、偽預言者という三つの敵が、いまや世界を人類の恩恵期間の終わりへと導いている。ホワイト夫人はこの内的原則を明確に指摘している。

私たちには一刻の猶予もない。私たちの前には苦難の時が迫っている。世界は戦争の気運にかき立てられている。まもなく、預言に語られている苦難の光景が現実となるだろう。ダニエル書11章の預言は、ほとんど完全な成就に達しようとしている。この預言の成就として起こった歴史の多くが、繰り返されるだろう。30節には、次のような力について語られている。「彼は苦々しく思って引き返し、聖なる契約に対して憤りを抱く。彼はそのように行い、さらに引き返して、聖なる契約を捨てる者たちと通じる。軍勢が彼の側に立ち、堅固な聖所を汚し、日ごとのささげ物を取り去り、荒廃をもたらす忌むべきものを据える。契約に逆らって悪を行う者たちを、彼は甘言で墮落させる。しかし、自分の神を知る民は力を得て行動する。民のうちの悟る者たちは多くの者を教えるが、彼らは剣と炎、捕囚と略奪によって、多くの日の間、倒れる。彼らが倒れるとき、わずかな助けが与えられるが、多くの者が甘言をもって彼らに付き従う。悟る者のうちの幾人かは倒れる。彼らを試み、清め、白くするためである。終わりの時に至るまで、定められた時がまだ先にあるからである。そして王は自分の思いのままに行い、自らを高め、あらゆる神の上に自らを大いなる者とし、神々の神に逆らって驚くべきことを語り、憤りが成し遂げられる時まで栄える。定められたことは行われるからである。」ダニエル書11章30-36節。

ここに記された言葉に描かれているような光景が起こるだろう。神を恐れる心のない人々の心を、サタンが急速に支配しつつあることを示す証拠を、私たちは目にしている。すべての者はこの書の預言を読み、悟りなさい。私たちは今、語られている苦難の時に入りつつあるのだから：

「その時、あなたの民の子らのために立っている大いなる君、ミカエルが立ち上がる。また、その時まで、国が存在して以来かつてなかったような苦難の時がある。その時、あなたの民は、書に名が記されている者は皆、救い出される。地の塵の中で眠っている多くの者が目を覚まし、ある者は永遠のいのちへ、ある者は恥と永遠の悔りへ。悟る者は大空の輝きのように輝き、多くの人を義に導く者は、とこしえまでも星のように輝く。しかしダニエルよ、この言葉を秘して、書を封印せよ。終わりの時まで、多くの者が行き巡り、知識は増し加わる。」ダニエル書 12:1-4. Manuscript Releases、第13号、394。

この一節において、ホワイト姉妹はまずダニエル書第十一章に言及し、次いで、「この預言の成就として起こった歴史の多くが繰り返される」という原則を明示している。彼女はその後、第三十節から第三十六節を直接引用し、続けて、「これらの言葉に描写されているものと類似した場面が起こるであろう」と述べている。第三十節から第三十六節を特定し、さらにそれらの節と類似した場面が起こると述べた後、彼女は次に、第十二章第一節においてミカエルが立ち上がる時、すなわち恩恵期間の終了を示している。このよ

うにして、彼女はその七つの節を切り分け、それらをミカエルが立ち上がる直前の歴史の中に位置づけている。

私たちはこれまでに何度か、30節から36節の歴史と、それがダニエル書11章の40節から45節とどのように対応しているかを扱ってきました。これからは、最後の六節において繰り返されている、11章の他の預言史の時期について考察を始めます。しかしその前に、30節から36節と40節から45節の対応関係の簡単な要約を、もう一度示します。

第三十節は、異教ローマから教皇ローマへの移行を示している。その移行の歴史は、330年、508年、533年、538年といった年代を示すさまざまな預言の箇所において扱われている。聖書預言における第四の王国から第五の王国への移行には、ほかにも預言的指標が存在するが、第三十一節において異教ローマは、496年のクローヴィスによって表象されるように、教皇制のために立ち上がる。この節において当初クローヴィスによって表象される異教の諸勢力は、508年までに、教皇制の台頭に対するいかなる異教的抵抗（常供）をも取り除く働きを成し遂げる。当時の戦争は、「力の聖所」によって表象されるその歴史の中でローマ市に破壊をもたらし、そして538年までに、異教の諸勢力は教皇制を地上の王座に据え、その後、彼女はオルレアン公会議において日曜法を制定する。

第三十二節から第三十六節は、暗黒時代の千二百六十年の間に教皇制が神の忠実な者たちに対してもたらした殺人的な戦いを示している。最終的に、教皇制は第三十六節においてその終わりに至る。第四十節において、レーガンは反キリストと秘密裏の同盟を結び、これは五〇八年によって表されるように、プロテスタント主義の抵抗が取り除かれた時を画するものであった。レーガンによる財政的支援と軍事力の投入は、四九六年において教皇制のために立ち上がった「武力」によって予型的に示されていた。ローマ市によって表される異教ローマの力の聖所の破壊は、まもなく到来する日曜法における合衆国憲法の破壊を予表している。なぜなら、憲法こそ合衆国にとって力の聖所だからである。日曜法において、教皇制は五三八年によって表されるように、再び地上の王座に据えられるのである。

そのとき、538年から1798年までの暗黒時代に起こったのと同様に、神に忠実な者たちに対して加えられる教皇制による殺人的迫害の最終期が始まる。これは、ミカエルが立ち上がるときである人類の猶予期間の終結へと至るが、そのことは、千二百六十年のあいだ繁栄してきた教皇制が「致命的な傷」の忿怒を受けた1798年によって示されている。

次の記事でこの研究を続けます。

あるときニューヨーク市にいた私は、夜のさなか、天に向かって階を重ねてそびえ立つ建物を見るよう促された。これらの建物は耐火であると保証され、所有者や建設者の栄光を示すために建てられていた。さらに高く、なお高くとこれらの建物はそびえ、その建造には最も高価な材料が用いられていた。これらの建物の持ち主たちは、「どのようにすれば最もよく神の栄光を現せるのか」と自問してはいなかった。主は彼らの思いの中にはなかった。

私は思った。「ああ、このように自分の財を投じている人々が、神がご覧になるように自分たちの歩みを見ることができたなら！ 彼らは壮麗な建造物を次々と築いているが、宇宙の支配者の御目には、彼らの計画や企てがなんと愚かなことか。彼らは、

心と意思のすべての力を尽くして、いかにして神の栄光を現すかを求めてはいない。これこそ人間の第一の務めであるのに、それを見失っているのだ。」

これらのそびえ立つ建物が建てられていくにつれ、所有者たちは、自己の欲を満たし隣人の羨望をかき立てるために使える金を持っていることに、野心に満ちた誇りで喜び勇んだ。彼らがそのように投じた金の多くは、強圧的な取り立てや、貧しい者を虐げて搾り取ることによって得られたものだった。天では、あらゆる商取引が記録されていることを彼らは忘れていた。不当な取引も、あらゆる詐欺行為も、そこに記されている。やがて、人々はその詐欺と傲慢のうちに、主がこれ以上は越えることを許されない一線に達し、ヤハウエの忍耐には限度があることを知るだろう。

次に私の前に現れたのは、火災の警報だった。人々は高くそびえ、耐火だとされている建物を見て、「完全に安全だ」と言った。だがこれらの建物は、まるでタールでできているかのように焼き尽くされた。消防車は破壊を食い止めるために何もできなかった。消防士たちは消火ポンプを操作することができなかった。

私は、主の時が来ても、高慢で野心に満ちた人間の心に何の変化も起こっていなければ、救うに力ある主の御手が滅ぼすにも力あることを、人々は知るだろうと教えられている。地上のいかなる力も神の御手をとどめることはできない。神の律法を顧みず、利己的な野心を追い求めた人間に報いを下すべく神の定められた時に、どのような建築材料を用いて建物を建てても、それらを滅びから守ることはできない。

教育者や政治家の間でさえ、社会の現状の根底にある原因を理解している者は多くない。政権を握る者たちは、道徳的腐敗、貧困、窮乏、犯罪の増加という問題を解決することができない。彼らは、経済活動をより確かな基盤に据えようとむなしく努力している。もし人々が神の言葉の教えにもっと耳を傾けるなら、人々を悩ませる諸問題の解決策を見いだすだろう。

聖書は、キリストの再臨直前の世界の有様を描写している。強奪や搾取によって巨万の富を蓄える者たちについては、次のように記されている。「あなたがたは、終わりの日のために宝をため込んだ。見よ、あなたがたの畑を刈り取った労働者の賃金、すなわちあなたがたが不正に差し止めたその賃金が叫んでいる。刈り取った者たちの叫びは、万軍の主の耳に届いている。あなたがたは地上で快樂にふけり、放縱に過ごし、屠殺の日のように自分の心を肥やした。あなたがたは義人を罪に定め、殺した。彼はあなたがたに抵抗しない。」ヤコブの手紙 5:3-6。

しかし、次々に成就しつつある時のしるしが発している警告を、いったい誰が読み取っているのか。世の人々にはどんな印象を与えているのか。彼らの態度にどんな変化が見られるのか。ノアの時代の住民の態度と少しも変わらない。世の営みや快樂に没頭していた洪水前の人々は、「洪水が来て彼らをことごとくさらって行くまで、知らなかった」。マタイ 24:39。彼らは天からの警告を与えられていながら、聞こうとはしなかった。そして今日、神の警告の声をまったく顧みることなく、この世は永遠の滅びへと急ぎ進んでいる。

「世界は戦争の精神によって騒ぎ立っている。ダニエル書第十一章の預言は、ほとんどその完全な成就に達している。まもなく、預言の中で語られている患難の諸光景が起こるであろう。」『Testimonies』第9巻、12-14頁。

